

「色眼鏡の魔法」

小澤
璃乃

色眼鏡の魔法

愛知県立二宮高等学校

小澤 璃乃

望んだ才能が望んだ当人に与えられたのなら、
どれほど良かったのだろう。

「え、やばっ。さすがは美術部。二人とも一年なの？」
「よくこんな色とか構図 思い付くね。これが才能
ってやつかー」

廊下で反響した声が、寂れた美術室に無遠慮に入
り込む。私は絵筆という魔法の杖を操る目の前の少
女に声を掛けた。

「いやあ、流石ですな玲君。絵を褒め称える声がこ
こまで聞こえてくるよ」

「それはあなたもでしょ」猫のように目を細めて返
答する。

「いやいや、凄いの君の構図だつてば。色なんて
混ぜたら誰にでも出来るもんなんだからさ」玲はふ
うん、と否定とも肯定ともとれる音を出し、また絵
を描き出す。

部員は一人、二人と現れなくなり、夏休み前には
私と玲、二人で活動するのが日常となる。今日も今
日とて、街の喧騒から隔絶された美術室の隅で、他
愛無い話をしながら筆を滑らせる――はずだった。

「どうする？ 陽彩」

「あ、ごめんごめん、何だった？」しまった、何も
聞いていなかった。

「最近ぼーっとしてるよね。寝不足？」思わずドキ
リとした。人に興味なさそうなのに、こういうところ
る鋭いんだよなあ。

「まあそんな感じ。どうかした？」

「あの応募のやつどうするの？ 締め切り十二月
のポスター。確か水彩で描かなきゃいけない、あれ」
「ああ、うーん。多分出す、かな。テストとかに被
らなかつたら」また玲はうんともうんともつかない
微妙な音を出し制作に戻る。

集中できていないこと、ばれていたのか。一人で
勝手に気ますくなつて窓の外に目を遣ると、昨日行
われた体育祭の後片付けをしている人々が見えた。
少し蓋が開いた絵の具が目端に映らないように、
もつと遠くの雲を眺めた。

赤信号で足止めを食らい、何の気なしに来た道を
振り返った。西日が目を晦まして、学校を私の目か
ら隠した。

学校が見えないことを確認すると、ため息と共に
隠していた感情が漏れ出た。

「気色悪いな、私。本当に」気づきたくなかつたな。

「こんな、どろどろな汚らしい感情に。」

どうか、卒業までの残り二年六カ月、彼女に気づ
かれませぬように。

――猫田玲。接点は同じ美術部員ということだけ。

二人なので当然かもしれないが、私達は仲良くなつ
た。入学前には美術部に入ると決めていた私とは異
なり、『楽をしたい』という理由で入部した子。しか
し毎日欠かさず活動しているのを見るに、根は真面
目なのだろう。面倒臭がり屋であることは確かだが。

そして何より、絵がかなり上手い。絵を習ったこ
とはない、と言っていたが信じ難い。確かに「デッサ
ンの軸に多少の甘さはある。だが、独創的な構図や
空間の表現など、観る者の目を引く『何か』がある。

より優れた絵を描きたい、なんて誰もが思ってい
ることだ。しかし……なんで、こうなつたのだろう。

これが夢だったら。

ばかばかしい夢だつて笑い飛ばせたら。

――この感情も、ただの悪夢の産物だったら、ど
れほど良かったことだろう。

ただいま、と呟いてリュックを下ろすなりソファ
に飛び込んだ。体も疲れているがそれ以上に心理的
な疲労が大きすぎる。玲は何も悪くないんだ。私個
人の問題。こんなことに振り回され、日常を疎かに
するなんてくだらない。

いや、こんなことをぐるぐる考えるなんて勿体な
いし、第一私らしくない。玲の言う通り、ただ慢性的
な寝不足が祟っているだけなのかもしれない。少
し、横になろう。

でも、いくらそう思い込もうと暗示をかけても、
心の隅の醜い感情は、存在感を増すばかりだった。

これをはつきりと自覚したのはあの時、文化祭の前日だった。受付係の打ち合わせがあった私は、部活に遅れそう、走って美術室に向かっていた。その日の部活はいつもと違い、翌日のための準備があったのだ。ああそうだ、横目で見た、運動場にある時計の文字盤が西日に照らされ、豆電球のように淡い光を放っていたのをよく覚えている。

今の時間から展示の用意を始めるとどう頑張っても、最終下校時刻ギリギリになってしまう。心の中で先生たちに謝りながら全力疾走して美術室に辿り着いた。……今思えば、あんなに心臓がうるさかったのは、これから起こることを警告していたのかもしれない。

そしてドアを開け『それ』を目にしたその時、陳腐な言い方だが、感じたのだ。

「時が止まった」と。

完璧だった。

差し込む西日。

中央の少女の絵。

クレセント錠の陰。

少し蓋が開いた絵の具。

机の上に散らばった絵筆。

中途半端に引かれている椅子すらも美しい。

哀愁とほのかな安らぎが共存する神秘的な空間。

『それ』は、私が見たのは、玲が描いた絵だった。思わず観る者の目を、心を奪う、そんな絵だった。

その瞬間、私は理解した。ずっと気づかなかった、気づいていないフリをしていた感情に。

玲が、憎い。

一滴、その感情がボタリと零れると、瞬きする間もなくすべてが染め上げられた。その醜悪なモノは、すべてを飲み込む黒だった。目を逸らしたくなるような、他の色を寄せ付けない黒。汚い黒。惨い黒。

玲は、私にはできないことを、すつとやつてのける。本人はちつとも頓着していないが、彼女の力は本物だ。

……薄々感じてはいた。

彼女の才能は努力で補うことができる代物ではなく、天賦の才であることを。

それに気づいてしまえばもう駄目だった。どうして称賛できようか。嫉妬に囚われた私の目には、彼女の絵は眩しすぎた。絵から発せられる神々しい光が、私の心の汚いモノを暴いてしまいそう、怖くて仕方がなかった。

彼女の絵をびりびりに引き裂きたいという衝動に、何度駆られたことだろう。自分の絵を観てため息を吐きそうになったのは、何回だろう。

そして最後に必ず、こう思うのだ。

『彼女さへ居なければ』と。

……わかっている。こんなのただの転嫁だ。玲は何も悪くない。でも一度そう思ってしまったら、それ

はずつと、隅からじつと、私を見ている。つづいたらはじめて、どろりとしたモノが溢れ出し、じわりじわりと蝕んでゆき、心すべてを支配しようとする。やめてくれ。

そもそもなぜこんな感情を抱いてしまったんだ。事の発端は？ あれが決定打になった理由は？ それを理解、しないと、いつまでも……苦しいまま……なのだから……修復ができ、ない……薄になる前に……ただの、友達に……戻りた、い……それだけ……なのに……なあ……

懐かしい背中が見えた。薄暗い霧の中、彼はせつせと手を動かしている。握られている木炭は空虚な白地に光と影を生み出す。

彼は魔法使いだっただ。

私は彼の手元を横から覗き込んでいる。唯一明るいそこには、一人の乙女がいた。あ、こつちを見た。恥ずかしそうに伏せた顔は少し赤らんでいる。穏やかな風で、乙女の髪がふわりと靡く――。

『素晴らしい出来栄えた、陽耶君！』突然、上から嬉しそうなしゃがれ声が降ってきた。

『陽彩、陽耶が美術科に進学したからといって、美術科に進もうとしなくてもいいんだぞ』次に諭す声。

『お兄ちゃんはそのいのね、妹は……』『可哀想に。比べられるだろうな』『驚見？』もしかして『』『あああああ、うるさいうるさいうるさいうるさい。』

老若男女、こちゃ混ぜに、無機質な声が聞こえる。耳を経由せず直接脳に乱入したそれらは、頭蓋骨の内側に当たっては跳ね返る。気持ちが悪い。思わず耳を塞こうとするも手がひどく重い。手を見るとのっぺりとした黒が覆い被さり、自由を奪っていた。粘つく、簡単にはどうにかできそうにない。絡めとってくる黒を何とかしようとして躍りになっていたら、いつの間にか魔法使いの背中はなくなっていた。それで思い知った。

私はただの人間、凡人である。

着信音が響いた。びっくりとして目を開けると、リビングの照明が目に飛び込んできた。ああ、ソファの上か。いつの間にか寝ていたようだ。腕時計に目をやると二八時二分を指していた。

嫌な夢だった。変な汗をかいている。不安になって自分の掌をまじまじと確認するが、いつも通り、薄橙だった。

ふう、と深く息を吐いた。黒は好きだが——嫌いな色などないけれど——夢に出てきたあの色だけは別だ。なんと形容したものか、あの毒毒しい色をいや、考えるのはよそう。

それにしても、この時間に電話なんて珍しい。知らないうちに帰っていた母が出て、音が止む。おかしい、小一時間眠ったはずなのにさらに疲れを感じ

る。制服のまま寝たのが失敗だったのかもしれない。もう少し寝転んでいよう、と決め込んだその時、電話の相手の名前が耳に飛び込んできた。

「陽耶！ 何かあったの？」

その名に思わず聞き耳を立てる。兄が電話を寄越すなんて余程だ。同じ認識から母も不安げな口調なのだろう。暫くすると母が、おめでとう、と言った。興奮気味に今度いつ帰ってくる？ と訊いている。

……ああ、またか。今度は何の賞なのだろう。いつもはメールだから今回は規模が大きいのだな。

魔法使いは健在だ。藝大に進学してめきめきと力をつけている。そんなことより。先程の夢の余韻が、上手く笑えない。絶対、長電話になる。このまま狸寝入りを続けるのは無理があるだろう。笑え笑え。あとはおめでとう、で済むはずだ。よし。

「母さん、誰から？」 精一杯取り繕った、眠そうな声で尋ねる。

「陽彩、起きたのね。陽耶からよ。陽耶？ 替わるわね」 はい、と携帯を渡される。

「魔法使いが何か喋っている。トーンは明るめ、早すぎず遅すぎず、最適なタイミングで。今だ、

「ええ、おめでとう！ 凄い、お兄ちゃん！ 今度は何のコンテスト？ どんな絵を描いたの？」 ありがとう、と返された胸の痛みよりも、安堵の方が大きかった。

ごめんなさい。

その日は、窓の外が白むまで寝付けなかった。

最悪だ。やつと眠れたと思ったら新聞配達音で目覚めてしまった。髪の毛は爆発していたし、歯磨き粉は中身無し。おまけに信号無視の車に轢かれそうになるときた。心なしか頭も痛い。

——不調の原因なんて一つに決まってる。

玲と違うクラスで良かった。今、話を振られてもまともに答えられるとは思えない。それどころか挨拶を交わすことができるかさえ怪しい。

……いつそのこと、今日は部活を休もうか。今日だけといわず、この醜い感情が収まるまで幽霊部員になつてしまおうか。

そんな現実逃避欲が頭をよぎるが、いつまでも避け続けることは不可能だろう。それに玲はああ見えて行動力がある。部活を休み続けたら必ず、クラスまで来るだろう。

腹を括るしかない。

部活に、行こう。

思えば、部活が楽しみに思えないなんて初めてではないか。……そうかもしれないな。

——覚悟を決めたとはいえ、近づくにつれ足は重くなる一方だ。なんだか禍々しい紫のオーラが美術室から放たれている気がする。頑張れ、私。彼女は何とも思っていないさ。それに文化祭から今日まで、隠し通したんだ。今更、見破られる訳ないさ。

己を鼓舞したところで何も変わらないのに。いやそんなこと考えるな。笑えば万事上手くいく。ハッピーフェイスだ、笑え笑え。

よし。速くなる心拍は無視してドアに手を掛ける。「失礼し——」

「ねえ、見て。できたー！」入室の断りさえ言い終わらないうちに目の前にやってきた、満面の笑みを浮かべた玲。ぴよぴよ跳ねながら、感想をねだって私の後ろをついてくる。

やめてくれ、頼むから。

勿論そんなことを言えるはずもなく、顔が引き攣らないように細心の注意を払いながら絵を観る。

水槽の絵だった。全体的に暗く、透けるような魚たちと月光で輝く泡沫が淡い空気を醸し出している。何より面白いのが、下から水面を見上げるような構図であることだ。低い彩度でありながら、奥行きを見事に表現している。水で揺らめく幻想的な赤い月が、より一層深い印象を与えている。声を響めなくてはならないような、それでいて大声で称賛しなくなる、そんな不思議な引力を持つ絵だった。

「すごいよ、本当に。私には到底真似できない」

「そつでしょ、もつと褒めろ、と満足気に玲は言う。

「うん、特に構図。玲は本当に凄いね。逆立ちしたってこんなアイデア浮かびやしないよ。お手本を切り取って貼っているって言われる私なんかとは、大違いだ。絵つて構図が一、二を争うくらい大事じゃない？ 天才だよ、本当。凄いね」

ああ、嫌になる。頑張ってるつもりなんだけどもなあ。長年描き続けてるし、絵画教室にも通っていたんだし。でもどう足掻いたって、玲の方が上なんだ。きっと彼女より褒められることはないんだろうな。この先ずつと。

「ねえ、陽彩」物思いかから覚めて玲を見ると、真つ直ぐな眼差しが私の目を射抜いた。

やめて、そんな目で、何もかも見透かすような、全てを解っているような純な目で、私を見ないで。

「何があつた？」

……何があつたかつて？ もういいよ。

原因はね——

「天嫌い」君だよ。

彼女の顔からゆっくりと笑顔が溶けていく。

「……この絵嫌い？」

「違う。君が。玲が。嫌い」

「……………そう、今まで、ごめんね。最後に理由とどうか、嫌いな箇所というか、聞いてもいい？」

その冷静さに腹が立つ。澄ました顔が。動揺させたい。傷つけてやりたい。取り繕うこともできないくらい、絵なんて二度と描けなくなるくらい——。

そんなどす黒いモノがフツフツ湧き上がってきた。

「ははつ、嫌いな所？ 理由？ 挙げ出したらキリがないよ、そんなもん」ああ、私こんなこと思っていたのか。こんなに溜め込んでいたのか。

「だつて、おさげてるの？ 前言ったよね、『楽しい』からこの部活に入ったんだつて。ばかにしてるの？ してるでしょ？ そんな、そんな……不純な理由でさ、入らないでよ」そんな人に負けたんだよな、私は。ちやちなプライドをバッキバキに折られて。残ったものは何だつて。

「私は！ 最初から決めてた！ 私の方が真面目だ、ちゃんと絵に向き合ってる！ 勉強だつてしてる、絶対に、君よりもたくさん絵を観てる！ それなのに」

『これが才能つてやつか』いつか耳にした、誰かの言葉が蘇る。

「なのに、なんでつ……なんで玲の方が上手いの？」才能の差は、埋められない。

どこまで行つても、私は凡人。

所詮、天才を羨んで後ろから眺めるだけの『その他大勢』のうちの一人なんだ。彼女のところには、立てない。

「ねえ、絵なんて君にとつてただの趣味なんでしょ。絵、好きじゃないんでしょ」

……………ああ、あれだ。何かに似ていると思つたら、ドリッピンダ。あの時ばかりは、どれだけ無茶苦茶に絵筆を振り回しても、怒られなかった。

「だつたらその才能ちようだいよ。なんで玲なの？ なんで私じゃなかったの？」

筆先から迸る鮮やかな魔法は解けてしまった。口から吐き出されるのは、下水よりもひどい色。例えるなら、吐瀉物と廃油と、暖炉にこびり付く煤の色。

「最初はね、楽しかったんだよ。手放して凄いと思えた。観てて心が弾んだし、次のが楽しみだった」

でも長くは続かなかった。気づいちゃったからね。「でもね、憎くなったんだ。その才能を、君は望んでないのに。私は渴望しているのに。なんて不平等

なんだろうね。私だけ汚いなんて耐えられない。ねえ、玲。玲はどう。汚くなって、くれないかな。

「私にはない見方が心底妬ましくなった。君にしかできない表現が心底羨ましくなったよ」

もう笑うしかないよな。

それまで眉一つ動かさなかった玲が、急にビクッとして目を見開いた。

何、なんで？ 今？ 私には解らなかつた。取り返しのつかないことを言っている自覚はあるけれど、今のはそこまで……さっき言ったことの方が玲

を傷つけたかと思つたのに。そこまで考えた時、違和感に気がついた。

「……あ？」自らの頬にある、違和感に。触れた指先が、濡れていた。

いつの間にか、泣いていた。なんで？ 泣くようなことなんて、ないはずなのに。

「あ、陽彩……」

優しい声。違う、いつも通りの玲の声。

「陽彩？」心配そうに私の顔を覗く玲を見て、あらんかぎりの声で泣きわめいて暴れたくなった。

「ごめつ、あきら。ごめんさい、ごめん、ね」私はなんてことをしてしまったのか。なんで、こ

んなに優しい人に、こんな感情を抱いたのか。

「陽彩、泣かないで。大丈夫だから」何にも大丈夫じゃ、ないよ。八つ当たりもいいとこだ。何にそんなにムカついてたんだよ。

「陽彩？ ……」ごめんさい、ごめんさい、ごめんさい。謝罪を続けながら啜り泣いていると、玲はハンカチ、いやティッシュ……と探しながらわたわたりしていた。

涙腺が決壊した、決定的な瞬間だった。

なんで、私はこんな、こんな優しい人に、こんな感情を抱いてしまったんだ。こんな、汚い醜い嫉妬を吐き出し君を陥れようとした人間に、損得勘定ぬきで手を差し伸べられる温かい玲に、なんで。

「陽彩？ ごめんね。泣き止んで」ああ、玲の目は綺麗ななあ。いつも、真つすぐだ。いやますは——

「違う」玲じゃない。

「ごめんさい、玲。玲は謝らないで」なんにも悪くないんだから。でも玲は優しいからな、謝つたんだろうな。

「ごめんね、玲のこと大好きだし玲の絵も本当に好き。ただ……」ああ、全部吐き出したのにな。今更

言うのを躊躇うなんて、でも、

「君に、絵に憎しみを抱いたなんて認めたくなかつた。ただの友達でいたかつた。嫉妬に狂う自分が許せなくて、嫌で嫌でたまらなくて、君のせいにしたかつたんだ」その結果がこの有り様だ。醜いよな。

「ごめんね」溜まりに溜まったモノを、汚泥をぶちまけたとて、楽にはならなかつた。ねえ、玲。

「助けて、玲」玲ならどうする？ 視界を阻まれて何にも見えないんだ。

「苦しい。玲……私は、どうすればいい？」自分が無理矢理引き裂かれているみたいで、もうどうしたらいいいか解らない。ぐちゃぐちゃに混ざりすぎて元の感情が何かすらも。

「……あさき、陽彩。なんでそれをわたしに言ったの？」

「嘘を吐いてないのは知ってるよ。たぶん、言い出したら止まらなかつたんだよ。衝動に任せて言ったんだよ」

そして玲は、人差し指をピンと立てて私の視線を誘導するように、目の前に突き出した。

「わたしが訊きたいのは、そのあと。私も私の絵も好きなんだけど私のせいにしたかつた、つて告白してくれた理由」告白した、理由？ 理由……玲の白く細い指を見ながら、ぼうつと考えた。

隠しておくのが申し訳なかつたから……？ 違う、そんな高尚な考えは持ち合わせていない。

全て吐き出して楽になリたかつたから……？ 違う、近いけれどそうじゃない。

言いづらいことを言つて自己満足に浸りたかつたから……？ 違う、それもあつたかもしれないが一番の理由ではない。

私が、全てを曝け出した理由。——ああ、これだ。

「君に、玲に、嫌ってほしかった」

「……そっか。教えてくれてありがとう。陽彩の苦しさを取り除けるかは分からないけど、思ったことを話すね」

玲は、床に崩れ落ちた私の隣に座り、話し出した。

「わたし色眼鏡って言葉、好きなんだよね。……怪訝な顔してるね、無理もないけど」小さく笑ってから続ける。

「これは本の受け売りなんだけど、この世界にはね、一人しかいないんだって。自分だけ。でもそれは決して孤独ではないの。どういうことかっていうと、自分の思い込みで世界は一変するってこと」それってどういう……？ そんな私の心を読んでか、ゆっくりと頷いて、続ける。

「ほら、小さい頃、色々言われたでしょ。あれはやつちやダメ、それはいいよ、これはやれつて具合にね。で、言われていくうちに、ああこれはいいんだ、って規則性を見つけていく。そうやって刷り込まれた材料から自分で『透明なルール』を作る。常識と似ているけれど、全く別物。それよりもっと根っこにあるものなの。だからね、客観視なんて土台無理。自分が作り上げて歳を重ねることに補強していった『透明なルール』は、独断と偏見に塗れてるんだから」透明、無意識の、意識『できない』こと。「すべては思い込みなんだよ。それに当てはめて考

えた時、わたしに妬みとか羨望とかの感情を抱いただけ。だからその思い込みを改変してあげたら、この世界が見せてくれる顔は変わるんだよっていうこと」解ったような、解っていないような。

玲は徐に絵筆を取り出し、魔法の杖のように振った。

「笑わないでね。……わたしは、魔法使いなんだ」

輝きを運んできた一陣の風が、玲の、彼女の短い髪を、そっと揺らした。

「何でも描ける魔法使い。絵を観た人の心に柔らかく、温かなものを残していく、そんな魔法使い。わたしはそう信じてる。だからその思い込みが『天才』に見えただけだよ。酷な言い方をするならば、陽彩に構図の才能が『ない』んじゃない。陽彩が『ない』と思っただけ。『自分をどう捉えているか』がすべて。考え方も、能力も、あとからついてくるものなんだよ」

そんなこと言われたって、ないものはどこをどう探したってないのに。どっやら顔に出ていたらしいふう、と大げさに息を吐いてから玲は言った。

「どこかに『ある』よ、絶対にね。『ない』って思い込んでいるのには原因がある」絵筆を西目に翳しながら続ける。

「二つ目、『ない』と思いたい理由がある。二つ目、『ある』を認めると都合が悪い。さあどっち」玲はそれっきり口を噤んでしまった。ポケットから取り出した青い絵の具を溶き始める。円を描くシアン。

ゆつたりと時間が流れる美術室で、彼女は魔法の杖の手入れをする。その作業すらも、常夜灯のような玲の心のぬくもりを感じる。

「……玲、玲はどうして『色眼鏡』が好きなの？」

手を止めて、凜と笑いながら彼女は言い切った。

「色眼鏡は『透明なルール』を完璧に言い表しているから」つまり、と立ち上がって絵の具セットを持ってくる。

「さっきわたしは『透明なルール』って言ったけれど、それは十人十色な訳でしょ。その人にとって『透明なルール』でも、全部違う色。それにルールが課せられていることにも気が付かないんだし、そこもピツタリじゃない？」白、橙、茶、紺、赤、そして黒。それぞれを愛おしそうに大切に取り出す。

「……きつと君だったから、神様は才能をプレゼントしたんだろうなあ」呟いたつものそれは、玲の耳にも入ったらしい。やれやれと言いたげに、色を溶きながら返答する。

「陽彩は適当にあしらってたけどね、あなたの色使いは本当に綺麗だと思うよ」

「でも構図の方が……」

「構図構図、そんなに構図が大事？ いや、実際問題、大事だけど、色はあなたの大きな才能でしょ。何をそんなに構図に引け目感してるの？」

「そんなに構図構図言っていないけれど……」

「いいや、言ってるね。物凄くこだわってる。トラウマでもあるの？ そんなに予防線張って」

ああ、予防線だったのかこれは。兄ちゃんと比べられることなんて昔からだから、当たり前すぎて気が付かなかつた。小さいときに、本能で身を守ろうとしたんだなあ。

構図の才能なんてないって思い込んでおけば比較された時、言い訳になるし。

もし才能があるって自身を認めたのなら、周囲の引き留める声押し切ってまで、長年続けた絵画教室をやめたことが無駄になる。

せつかく、やめて比較されることはなくなったのに、認めたら自分で比べてしまつてまた辛くなるから、『ある』って思いたくなかつたのかなあ。

「そもそもだよ、陽彩は何で絵を描くの？ 絵を描いて何がしたいの？」

口調はいつも通りだが纏う雰囲気はまるで違う。ひんやりとした、何物にも染まらない高潔な純白。玲は私なんかより、よっぽど考えているのだろう。そんな当たり前のことすらも即答できないなんて美術部失格だ。

「昔は、楽しかったから、描いていた……はず。でも、いつからか他人と比べられて、義務みたいになつちやつて」「言葉を噛み締めてゆっくり吐き出す。

「玲は？」

「楽しいからだよ。決まつてる」でもそれだけじゃない、と絵筆をぎゅつと握りしめ、静かに続ける玲。

「……わたしと、人とコミュニケーションするの苦手だつたんだ。自分の考えを上手く発信できなくて、

だからね、絵が唯一の手段だと思つたの。自分の色眼鏡を掛けてもらうことはできないけど、疑似体験みたいな。芸術って心を動かすためのものだけど、訴えるつてこういうことじゃない？ わたしはそれを、わたしの目に映る世界を絵で伝えたい」

やつぱり凄い。同い年とは思えないぐらいだ。

「分かつた？ こんなだけど一応いろいろ考えて美術部に入ったの！ 楽しみたいだけじゃないよ！ ちよびつとだけ、傷ついたんだからね」冗談めかして笑っているけれど、本心であることは伝わる。申し訳ないことをした。玲を直視できず、目を伏せて絵筆の先を見つめる。

「本当にごめん。許してくれとは言わないから、どうしたらまた話してくれる？」また友達になれる？

「絵を描いて、描いて描きまくつて」拒否権など端から無いが、他意のない澄んだ目で射抜かれ、大きく頷いていた。

「うん」精一杯の誠意を込めて返す。この約束に恥じない行いをしよう、そう深く誓つた。

「あと、わたしの絵褒めて！ さっきみたいにダラダラ自分の反省しやなくて、いつもみたいに。一個一個！」

「勿論だよ。まず、これが水槽の中であることがはつきり見て取れるのが凄い。彩度が低いうえ、水中だから余計難しかったろうね。それからこの赤い月色もさることながら、この配置。三角構図からちよつとずらしたこれが、私好きなんだよ」いつも通り、

すると口から感想が出てくる。横でふんふんと揺れながら玲が頷く。

「これもいつも通り。……ああ、なんか。」

「楽しいな」

「うん」

色眼鏡で溢れかえつた世界の端っこ、二人肩を寄せ合い、他人の眼鏡を覗き込む。窓の外では、翠緑の葉が楽しげに舞い、美術室に爽やかな風を吹き入る。

突然の強風で飛んでいきそうになった紙の束がめくれるのを眺めていたら、奥底に眠っていた一つの感情に気づいた。

やつぱり諦めたくない。絵を描き続けていたい。先のことはまだ解らないけれど。

「玲。考え続けるよ。絵画教室のことも、進路のことも。これから考えがどう変わるかなんて解らないけれど、絵、描くよ。描いて描きまくる」

「うん、観せてね」観てくれる？ と訊こうと思つたらこれだ。

「ありがとう」全ては、この五文字に。

「ねえ、ずつと床に座つたまままたし椅子に座ろうよ」
「それもそうだね」

どちらからともなく、魔法の杖を取る。

心地よい風が吹く、雲一つない青空の秋の午後。寂れた美術室は、透き通つた色彩に溢れんばかりに満ち満ちていた。